

本発表の目的は、デイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-76)が『人間本性論』(*A Treatise of Human Nature*, 1739-40)で提示している統治(government)の起源についての説明を、人々がどのようにして統治体の判断の正当性を承認するのかという観点から精査し、統治の権威の成立する心理的機構を浮き彫りにするところにある。

「人は、想像力によって強力に支配されており、対象の持つ実在的かつ内在的な価値(real and intrinsic value)によりも、その対象が自らに対して現れる見え方に、自らの心情を釣り合わせる」(T3.2.7.2)。ヒュームによれば、このような心的傾向が招く危険な結果への対策こそ、人が社会のなかに統治体を設立する理由である。ヒュームはこう説く——人は、上に述べた傾向のせいで、遠く離れた対象によりもすぐ近くにある対象にいつそう心を動かされる(T3.2.7.2)。そのゆえに、人はしばしば「社会の秩序の維持よりも現にある些細な利点を選好」してしまう(T3.2.7.3)。とはいえ、わたしたちは、そのような些細な利益と、正義を守り社会的秩序を維持することとが、いずれも遠くにあるときには、内在的な価値の大きい後者のほうを、いつそう重要視する(T3.2.7.5)。そこで、わたしたちは、手近にある些細な利益を優先させるという「この本性的な弱点を大いに遺憾に思い」(T3.2.7.5)、最終的には、自らのそのような弱さに制約を課すために、統治者を選出して統治体を設立し、その判断に服する(T3.2.7.6)。

統治という制度の起源にかんするヒュームのこの論述に対して、これまで研究者たちがおもに問題としてきたのは、たとえば、統治者が社会的秩序の維持に見出す利益とはどのような利益であるのか、であった。ヒュームの記述には、一見したところ、統治者が人々に対して正義の遵守を強制するようにする利益がどこにあるのか、その点の明確な記述が見当たらない。そこで、従来の研究が扱ってきた問いは、一つの重要な疑問ではある。

しかし、上述のヒュームの説明には、それよりももっと手前に、問われるべき問題がある。それは、人はそもそもなぜ、手近な利益を優先することを「遺憾に思う」のか、である。なるほど、当の利益から遠く離れた時点では、その利益よりも正義の遵守のほうが、一層価値を持つように見え、心を動かす。けれども、当の利益が実際に近づいてきたときには、正義の遵守よりもその利益のほうが、一層好ましく見え、心を動かす。それでは、まさにこの時点にあつて、かつての判断に固執できないことを嘆く理由は、どこにあるのか。なぜ現に手近にある利益こそ真に価値を持つとは考えないのか。ヒュームはその理由を詳述していない。けれども、かれの説明に従えば、手近なものを優先することは賢明な判断ではないという嘆きが、統治を設立しそれに従う出発点であるはずである。そうであれば、この点を明確にして初めて、なぜ人々が統治体の判断に権威を認め、それが強制してくる正義の遵守に服する気になるのか、という統治の正当性の出自が明らかになる。

そこで、本発表では、うへの問いに答えるために、「対象のその時々見え方」と「実在的かつ内在的な価値」との区別にかんするヒュームの言説をまず問い直し、それに基づいて、『人間本性論』でのヒュームの統治論において統治の権威が成立する心理的機構を究明する。